

「意味」と「言語形式」の関係を創発・拡張・破綻させる

「認知モード」における「主観」の存在

中野 研一郎

京都大学大学院

anri98@hera.conet.ne.jp

- ・言葉には、主体による外部世界の解釈、外部世界のカテゴリー化、意味づけ等にかかわる認知的な要因がなんらかの形で反映されている。...(言語の)形式・構造にかかわる制約も、根源的に言語主体の認知能力や運用能力にかかわる制約によって動機づけられているという視点に立つ...。 山梨 (2000: 250)
- ・ ...言語能力の根源は、どこに求められるのか。言葉の意味と形式の関係は、どのように変化しどのように揺らいでいるのか。言葉の獲得過程は、どのような経験的な基盤に動機づけられているのか。言葉の創造性の根源は、どこに求められるのか。...過去の言語学の歴史を振り返った場合、形式的な理論体系のなかに生じた問題は、その形式的な体系の内部にとどまる限り実質的な意味での解は得られていない。 山梨 (2004 a: 93)
- ・認知言語学のアプローチは、外部世界に対する解釈のモード、外部世界のカテゴリー化と意味づけのプロセス、認知主体の感性、身体性、等を反映する言語現象の諸相を、科学的な分析の対象として研究していく主体性重視の言語観に基づいている。 山梨 (2004 b: 180)
- ・ 中野：そしたら、I found her smart ってどういう意味なん？
生徒：彼女は賢いってことがわかった。
中野：じゃね、この文で her はどんな役割をしているの？
生徒：主語。
中野：え？じゃ、smart は？
生徒：動詞。
中野：えっ、え？それじゃ、found は？
生徒：う～ん、なんやろ、わかりません。
中野：(しばらくして、中野、椅子からすべり落ちる...)

1. はじめに

各言語の文型・語順を含むその固有の形式は、その言語を使用している認知主体が事態をどのように把握しているかを反映することで、「意味」と「形式」の結合として創発される。また、その事態把握のあり方そのものは認知主体の「主観性(subjectivity)」と呼ばれるものであり、「意味」と「形式」の結合としての創発のされ方及び創発の結果である構文等は、認知主体の「主観

(subjectiveness)」によって動機づけられていることになる。したがって、各言語がなぜその言語特有の語順なり構文なりをとるのかという問いにあたっては、すなわち、なぜそのような創発のされ方をされるのかというメカニズムを探るにあたっては、構文レベルに留まる視点ではそのメカニズムは明らかにならず、構文レベルとは別レベルの道具立てが必要となる。構文現象のメカニズムを探るためには、動詞主導、構文主導といった構文主義からなる視点の外側に出ることが要求される。

語順・構文が創発されるメカニズムを捉えるにあたっては、「主観(subjectiveness)」をその言語特有の「意味」と「形式」の結合として「主観化・主体化(subjectification)」させる母体である「認知モード(cognitive mode)」の存在に注目することが必要となる。一般的に、このメカニズムにおいては、Langacker のステージ・モデルを含み従来から様々な用語で2つの認知モードの存在が指摘されてきたが、どの用語を用いた説明も、日本語特有の「主観化/主体化(subjectification)」の母体である、「事態把握とは認知の対象を認知主体の意識に内置・同化させることによって生じる認知判断」という「主観(subjectiveness)」に動機づけられた「内置・同化の認知モード」の実相と、さらに、「その認知モードは他者(聞き手)と共有・共同化」されるという「主観」が把握されていない。つまり、日本語には日本語の「意味(meanings)」=「言語形式(linguistic forms)」を創発させる「認知モード」を動機づけている「2種類の主観」が存在していることが捉えられていない。1つは、「事態把握は認知対象を認知主体の意識[認知領域]において内置・同化させることによって可能」という「主観」であり、これは「認知対象=認知主体の意識・領域」という「内置・同化の認知モード(cognitive mode)」の成立を動機づけている。もう1つは、「内置・同化の認知モードは他者との共有化が可能」という「主観」である。「事態把握は認知主体(conceptualizer)の意識において認知対象が内置・同化されることによって可能」という主観(subjectiveness)」が共同化・共有化されれば、その「主観(subjectiveness)」に動機づけられた「認知モード」自体も、共同化・共有化される道筋をたどる。事態把握をこの共同化・共有化された内観・同化の認知モードによっておこなっているか、おこなっていないかの主観判断を表す形式標識が、日本語における格助詞「が」と係助詞「は」の存在である。「事態把握は認知主体の意識において認知対象が内観・同化されることによって可能」という主観」に動機づけられた「認知モード」は、「事態把握は共同化・共有化される」という「主観(subjectiveness)」とそれを反映する「言語形式(linguistic forms)」を生み出す。こうしたことがらは、日本語に特徴的に見出される認知・言語現象と言えるだろう。日本語に特徴的に見出される「主観(subjectiveness)」と「認知モード(cognitive mode)」の存在は、英語の表層的な「意味=言語形式」の関係の観察からは原理的に見出すことができない。また、英語の「意味=言語形式」の関係は、日本語とは異なる「主観(subjectiveness)」に動機づけられた「認知モード(cognitive mode)」によって創発・規定されているので、日本人が英語を習得しようとする際の妨げの大きな要因の1つとなっている。

本研究の目的は、日本語特有の「統語形式」として「意味」を創発することを可能にしている認知のメカニズムである「内置・同化の認知モード」の実相と、それを動機づけている「主観(subjectiveness)」の存在を明らかにすることにある。さらに、そのような始原的な「認知モード(cognitive mode)」とそれを動機づける「主観(subjectiveness)」の存在が、日本語と英語において、

それぞれの言語の語順(word order)・構文(composition)・主語(subject)・時制(tense)等の「文法形式」と「事態把握(意味)」の関係を、どのように創発・拡張させているか、また英語においては、「文法形式＝事態把握(意味)」の関係をいかに破綻させているかを解明することにある。その結果として、普遍的な有限の原理と個別言語ごとに規定されたパラメーターによって、経済性や最適性に基づいた計算結果としての統語形式が文であるとみなす、生成文法の言語観に反証を提示すると共に、言語学におけるパラダイムシフトを確定することも併せて目的としている。

2. Subjectification, Grammaticization の限界

2.1. Langacker の subjectification(主観化/主体化)と grammaticization(文法化)

Langacker の認知文法においては、認識の主体と客体の非対称性に基づき、主体的(subjective) / 客体的(objective)という用語が、外部観測的な認知モードと内部観測的な認知モードのあり方を説明するステージ・モデルでも使用されている。しかしながら、Langacker における「主観化 / 主体化(subjectification)」は、Langacker 1990b(5-38), 1998(71-89), 2000(297-315)においても説明されるように、客体的に把握されていたものが客体性を徐々に失い、もともと内在していた主体的な把握しか残らなくなるような意味変化を表している。つまり、Langacker の「主観化 / 主体化(subjectification)」とは、ある具体的な意味内容を持った語彙が徐々にその意味内容を希薄化させ、主体的把握という認知プロセスとのみ対応するようになる過程を意味している。

Subjectification is a shift from a relatively objective construal of some entity to a more subjective one. The cases considered here involve *attenuation* in the degree of control exerted by an agentive subject. When carried to extremes (as it is in highly grammaticized forms), attenuation results in the property of *transparency*, which has important grammatical consequences. (Langacker 2000: 297)

具体的には have という動詞を例にとり、次の例文で示されるように、

- a. *Be careful—he has a knife!* [source of immediate physical control]
彼はナイフを所持している。
- b. *I have an electric saw (but I seldom use it).* [source of potential physical control]
私は電動ノコギリを所有しています。
- c. *They have a good income from investments.* [locus of experience, abstract control]
彼らは投資から十分な収益がある。
- d. *They have three children.* [locus of social interaction, generalized responsibility]
彼らには子どもが3人いる。
- e. *He has terrible migraine headaches.* [passive locus of experience]
彼はひどい偏頭痛持ちだ(悩まされている)。

- f. *We have some vast open areas in the United States.* [locational reference point, diffuse locus of potential experience] アメリカには広大な未開拓地がある。

(Langacker 2000: 307)

直接的また物理的な「所持」から「所有」の意味に拡張され、抽象的なものを所有する「経験の所定化」(a. b. c.)、一般的に責任が生じる「社会的相互関係の所定化」(d.)、「経験を受動的に所定化」する表現(e.)、「存在の位置関係のみの表現」(f.)へと、具体的な叙述内容が希薄化している過程を説明している。Langacker の認知文法においては、際立ち(prominence)が高く第1に注目される参与体はトラジェクター(trajector)と呼ばれ、その次に際立ちの高い第2に注目される参与体はランドマーク(landmark)と呼ばれる。そして、文レベルでは、トラジェクターが主語として、ランドマークが直接目的語として表されるとする(Langacker, 1987: 231-236)。さらに、他動詞 have の用いられ方に認知能力としての参照点能力が関与するとし、参照点(reference-point)は主語で表現され、認知の標的(target)は直接目的語で表現されるという説明をとる(Langacker, 1993a: 1-38)。一般動詞としての have が最終的には完了形に用いられる助動詞という文法要素まで拡張していく過程が「文法化(grammaticization)」と呼ばれ、その「文法化」には意味内容が希薄化する主体化という認知過程が伴うという説明がなされている(Langacker 1998b)。しかしながら、ここにおいて Langacker が明確にしようとしてしまっていない認識・思考の可能性の中心は、ある具体的な意味内容を持った語彙が徐々にその意味内容を希薄化させる「主体化(subjectification)」とは何なのかを問いかけることにある。すなわち、「もともと内在していた主体的な把握」における「もともと内在していた把握 / 主体的把握」とは何であり、また、その「主体的把握」と「客体的把握」を可能にしている「認知モード(cognitive mode)」とは何なのか、そのような「客体的把握」から「主体的把握」へと移行する「認知プロセス」を可能にしているものは何なのか、という問いかけこそ、Langacker の認識・思考の可能性の中心を見出さなければならない。なぜ Langacker 及び西洋の認知言語学が提示する原理・視点でこの問題を解明できないのか、この問題の本質である。英語を成立させている認知モード(cognitive mode)を用いて観察・思考を続けていても、have という他動詞の意味内容と、have に伴う主語の意味内容が、なぜ希薄化するかは明らかにならない。Langacker(1987, 1993a, 1998b)で提示される認知文法の原理・視点、すなわち英語における「意味(meaning)=言語形式(linguistic forms)」の関係を創発し保障している「認知モード(cognitive mode)」による認知・思考の原理・視点では、「希薄化(attenuation)」や「文法化(grammaticalization)」のメカニズム及び現象は解明することができない。また同様に、「参照点(reference-point)」として規定される主語の存在と、「トラジェクター(trajector)」として規定可能な主語の存在の違いも、明確に説明することができない。

2.2. Traugott の subjectification(主観化/主体化)と文法化(grammaticalization)

Traugott においては、「主体化(subjectification)」という概念は「語用論的推論の慣習化によって意味が命題内容に対する話者の信念、態度に基づくようになること」と定義される

(Traugott 1995:31-54, Hopper and Traugott 2003)。つまり、Traugott のいう「主体化」とは、ある語の元の意味が漂白化(bleach)される前に、語用論的富化(pragmatic enrichment)によって認知主体による追加推論がなされることを指す。語用論的富化の段階では、認知主体の読み込み・解釈が追加推論としてその語の意味に加わり、その後、その語が持っていた元の意味が漂白化される。「増えて減る($A > A+B > B$)」という過程を、Traugott は「文法化(grammaticalization)」と定義している。具体的には *Since S₁, S₂* (since 節+主節)の接続詞 *since* は、「S₁以後に S₂ならば、S₂が理由で S₂だろう」という認知主体の語用論的な追加推論がおこなわれることで、*since* が持っていた「以後」という本来の意味から、「理由」という意味へ意味的に拡張されるという説明を用いている。この認知主体による追加推論が行われることが、Traugott では「主体化(subjectification)」という概念に該当している。

2.3. Langacker の主体化(subjectification)と Traugott の文法化(grammaticalization)の

原理的境界

Langacker の「文法化(grammaticization)」にしる、Traugott の「文法化(grammaticalization)」にしる、語の意味変化を認知主体が持つ「主観性(subjectivity)」が「主体化(subjectification)」するプロセスとして捉える視点であるが、この視点それ自体は英語の統語構造を英語特有のあり方で成立させている認知モード内からの発想である。つまり、英語において、なぜ認知主体の持つ「主観(subjectiveness)」が英語の言語形式特有のあり方で「主体化(subjectification)」のプロセスをとるのかという問いには、英語特有の認知モードを用いて「意味＝形式」という関係の創発・拡張現象を観察・考察していても、答えを見出すことができない。すなわち、認知主体の持つ「主観」の顕れ方を捉えるためには、一度その言語特有の言語形式を創発させる認知モードの外へ出て、他の認知モードとの相関関係の中から、「意味拡張(meaning extension)」や「主体化(subjectification)」や「文法破綻(grammatical collapse)」という言語現象を動的に捉え直す必要がある。

各言語特有の言語形式における認知主体が持つ「主観」の主体化(subjectification)・具現化(embody)のされ方は、事態を認知する上で用いられているその言語特有の認知モードと、そのモードによる事態認知の結果であるその言語の「意味＝形式」の関係からだけでは捉えきれない。

中村(2004)でも指摘されていることだが、人間という認知主体が事態を捉えるにあたり、英語と日本語の言語形式(linguistic forms)の比較から、少なくとも 2 種類の認知モードを用いていることが見て取れる。この 2 種類の認知モードとは、結論から言えば、「環境・世界は客観的に存在し、事態は客観世界で生起する」という「主観(subjectiveness)」に動機づけられた、英語を代表とする「外置・外観の認知モード(displaced mode of cognition, これ以降 D モード)」と、「事態把握は認知主体(conceptualizer)の意識において認知対象が内置・同化されることによって可能」という「主観(subjectiveness)」に動機づけられた、日本語を代表とする「内置・同化の認知モード(self-assimilation mode of cognition, これ以降 A モード)」である。

この「事態把握は認知主体の意識において認知対象が内置・同化されることによって可能」とする「主観」に動機づけられた、日本語を代表とする「内置・同化の認知モード(A モード)」の

存在は、「環境・世界は認知主体の外部に客観的に存在し、事態は客観世界で生起する」という「主観」に動機づけられた英語を代表とする「外置・外観の認知モード(D モード)」に立脚した認識・思考のあり方からは、原理的に見出すことができない。つまり、「環境・世界が客観的に認知主体の外部に存在する」という「認知主観」による認識・思考様式では、「事態認知の対象に自己を同化させることが可能」とする「主観」によって創発・形成された「言語形式(linguistic forms)」をいくら観察してみても、その「言語形式」を創発・形成させている「認知モード(cognitive mode)」と「認知主観(subjectiveness)」の存在を見出すことは原理的に不可能である。また、この始原的な「認知モード」と「認知主観」の存在が、D モードに立脚した「意味(事態把握)=言語形式(文法)」の関係に変容をもたらすという考察も、原理的に不可能である。これは、西洋において、言語学及び哲学が言語を取り扱う学問として成立するためには、言語の「意味=形式」の関係で捉える認知対象が、客観的に認知主体の外部世界に存在するという前提が、アプリアリに是認されなければならないことに起因している。同様に、客観的に存在する事物・形式の理解という西洋の学問原理に基づいて日本語を研究してみても、日本語の「意味」と「形式」の関係を創発させている「事態把握は認知主体の意識において認知対象が内置・同化されることによって可能」とする「主観」の存在を発見することができない。「事態把握は認知主体の意識において認知対象が内置・同化されることによって可能」とする「主観」に動機付けられた日本語を代表とする「内置・同化の認知モード(A モード)」の存在は、西洋の言語学・哲学の思考を支えるパラダイムや視点の外部に出ることによってしか見出すことができず、この「主観」や「認知モード」の存在を見出すためには、「客観という主観」から逃れながら、言語を「客観視」とするという、およそアンビバレントな思考様式と視点を同時に併せ持つ困難さの中に生きることが要求される。

また、「事態把握は認知主体の意識において認知対象が内置・同化されることによって可能」とする「主観」に動機づけられた日本語を代表とする「内置・同化の認知モード(A モード)」の存在の発見と、この認知モードにおける人間の認知のあり方の始原性の発見は、「環境・世界は認知主体の外部に客観的に存在し、事態は客観世界で生起する」という「主観」に動機づけられた英語を代表とする「外置・外観の認知モード(D モード)」によって創発された「意味(事態把握)=言語形式(文法)」の関係が、拡張・破綻させられる現象を予測させる。つまり、日本語に特徴的に見出される「認知の対象を自己の意識に内置・同化させることで事態把握を図る認知モード(A モード)」の存在が、英語の「環境・世界は認知主体の外部に客観的に存在している」という「主観」に動機づけられた「言語形式」を用いる「意味」の創発(emerge)・拡張(extension)の仕方に影響を及ぼしていることが、理論的な帰結として予測される。英語における語彙の意味の多義化及び構文の拡張の問題の多くは、この視点を導入することによって解くことができると予測できる。また、主語(subject)とは何か、時制(tense)とは何かという問いかけについても、適切な解を得ることができるだろう。

「事態把握は認知主体の意識において認知対象が内置・同化されることによって可能」とする「主観」に動機づけられた、日本語を代表とする「意味(事態把握)=言語形式(文法)」の関係の存在は、認知主体(conceptualizer)である人間にとって、事態を「外置・外観する認知モード(D モード)」で捉えるよりは、「認知の対象に自己の意識を同化させる認知モード(A モード)」で捉

える方が、認知的に自然であるという仮説の設定を可能にしている。英語においても子どもが母語を習得する初期の段階で、「認知対象を自己の意識に内蔵・同化させる認知モード(Aモード)」で捉えた事態認識が、「中間構文」として「言語形式」に具現化(embodied)されていると理解できる例が、中村(2004:48)で引用されている。英語の「中間構文」においては、「言語形式」上の「目的語」として捉えられるべき認知対象が、「主語」位置に顕れる。

That flower cuts. (庭の花を見て2歳8ヶ月の子どもが「あの花は切れるよ」)

This can't squeeze. (硬いゴム製の小さなオモチャを握りながら「これは握りつぶせない」)

(Clark 2001:396-7)

また、中村(2005)で指摘されたように、“me think”という「言語形式」がかつて英語にも存在しており、それが“I think”という「言語形式」に変遷したという通時的実態が存在することからも理解されるように、英語の「事態を外置・外観する認知モード(Dモード)」は、「認知の対象を自己の意識に内蔵・同化させることによって事態把握を図る認知モード(Aモード)」が、認知的に変容を受けた結果であろう。

言語の「意味(事態把握)=言語形式(文法)」の関係に関わる多くの問題は、当該の言語を使用する認知主体が事態をどのような「認知モード」で捉えているかを理解することで、また、用いている「認知モード」がどのような「認知主体の主観」によって動機づけられているかを理解することで、明らかになっていくであろう。さらにこれらの問題は、特定の「主観」によって動機づけられた「認知モード」が創発する言語の「意味=形式」の関係が、他の「主観」との間で動的な相対・緊張関係に置かれることにより、そのあり方に変容を受けるということを理解することで、解明することができるだろう。「言語形式(文法)」と「意味(事態把握のされ方)」の関係は、当該言語の外部に存在しながら当該言語を「意味」的・「形式」的に変容させる他の「主観(subjectiveness)」との、動的な相対・緊張関係として捉えられなければならない。本質は決して顕にならない。

3. 認知モード(cognitive mode)と言語形式(linguistic forms)

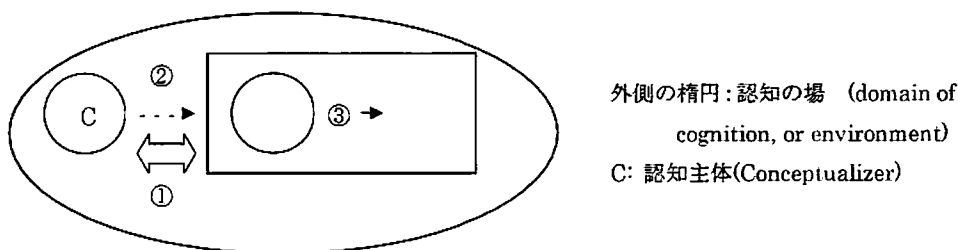
3.1. 2つの認知モード(cognitive mode)

Langacker (1985: 109-150)のオン・ステージvs. オフ・ステージモデル(on-stage vs. off-stage)でも指摘されたように、言語の「意味(meaning)=形式(linguistic forms)」の関係を動機づける「認知モード(cognitive mode)」が基本的に2つあることが知られている。中村(2004)においては、その2つの認知モード(cognitive mode)が次のようにまとめられている。

- | | | |
|------------------------|------------------------------------|------------------|
| a. 印象的 vs. 分析的 | (impressionistic vs. analytic) | (Bally 1920) |
| b. 非報告的 vs. 報告的 | (non-reportive vs. reportive) | (Kuroda 1973) |
| c. 経験的 vs. 物語的 | (experiential vs. historical mode) | (Lyons 1982) |
| d. オン・ステージ vs. オフ・ステージ | (on-stage vs. off-stage) | (Langacker 1985) |

- e. 状況中心・人物中心 (situation vs. person focus) (Hinds 1986)
- f. 経験的 vs. 外部的 (experiential vs. external) (Wierzbicka 1988)
- g. S-パースペクティブ vs. O-パースペクティブ (S-perspective vs. O-perspective) (Iwasaki 1993)
- h. 直接的 vs. 外置的 (immediate vs. displaced mode) (Chafe 1996)
- i. 全体的 vs. 分析的 (holistic vs. analytic understanding) (Marmaridou 2000)
- 中村(2004:34)

このうち、「状況密着型の認知モード」と定義されている認知モードにおける主観性(subjectivity)のあり方を、①認知主体と対象の不可分のインタラクション、②認知主体に生じる認知プロセス、③その認知プロセスによって捉えられる認知像、と定義することによって、「認知のインタラクション・モード(Interactional mode of cognition、Iモード)」と呼ばれる「認知モード(cognitive mode)」がモデル化されている。



① 両向きの二重矢印線：インタラクション

(例えば地球上の C と太陽の位置的インタラクション、四角の中の小円は対象としての太陽)

② 破線矢印：認知プロセス (例えば視線の上昇)

③ 四角：認知プロセスによって捉えられる現象 (例えば太陽の上昇)

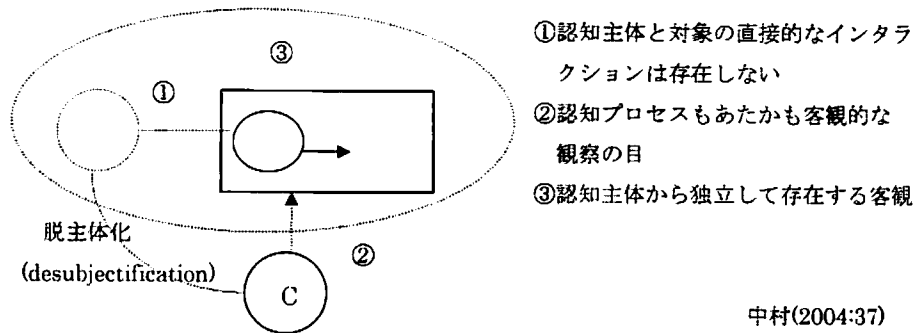
中村(2004:36)

ここで、このモード・モデルが単純にオン・ステージモード(on-stage mode)と呼ばれない理由として、オン・ステージは主(認知主体)と客(対象)が同一プレーン上にあることは示すが、主客合一的なインタラクションを示さないこと、また、間主観的なインタラクション、つまり相手の意図を読むというような認識(心の理論)までは含まないことなどが挙げられている。また、このような「状況密着型の認知モード(cognitive mode)」に対して、「主観的な認知像や印象をあたかも客観であるかと思ひ込むことで初めて成立する認知モード(cognitive mode)」として、「外置の認知モード(Displaced mode of cognitive)」モデルが図示されている。

(次ページモデル図参照)

この認知モデルが成立するためには、「事態」は「認知主体」の意識の外部で客観的に生起するとい

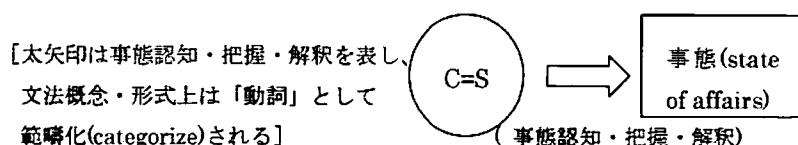
う「主観」があらねばならない。



3.2. 外置・外観の認知モード(cognitive mode)と言語形式(linguistic forms)

英語の「意味(事態把握のされ方) = 言語形式(文法)」の関係を動機づけている「外置・外観の認知モード」では、事態認知における認知主体の意識と対象の直接的な同化の存在は排除され、認知像としての事態は、認知主体から独立した客観世界に生起するという「主観(subjectiveness)」が、アプリアリに受け入れられている。したがってこのモードから創発される言語を用いての認識・思考も、「認知主体の外部に客観的に存在する世界において事態は生起する」という「主観」により条件付けられ、かつ、制限を受けていることになる。そして、その仮借された客観世界で生起しているものこそが分析・研究の対象となる。仮借された客観世界で生起している事態を捉えるためには、捉える存在としての認知主体は常に仮借された客観世界の外側にいることが要求され、そのような認知のあり方を反映する「言語形式(文法)」においても、認知主体は客観世界に生起する事態を認知する位置に立つことが要求される。つまり、仮借された「客観世界」を外観するためには、「言語形式(文法)」上も「客観世界」の存在を外観するための参照点(reference point)が必要となり、その参照点(reference point)こそが、この「認知モード(cognitive mode)」によって創発される「意味(事態把握のされ方) = 言語形式(文法)」の関係における「主語(Subject)」となる。この「認知モード」においては「客観世界」を仮借するがために、その「客観世界」を参照する存在としての「主語」の存在が「言語形式(文法)」上必要とされている。その結果、言語の「意味(meanings)」と「形式(forms)」の関係に、この認知モード(cognitive mode)が捉えた事態を反映するためには、仮借された客観世界を「認知する存在」が第1位的に際立つ(prominent / salient)ことでプロファイル(profile)され「参照点(reference point)」となり、同時にそれは仮借された客観世界の外側に立つことで、「言語形式(文法)」上の「主語」の役割を担わされることが必要となってくる。したがって、このモードによる基本の言語「意味=形式」の関係は、認知主体が外部に存在すると仮借された客観世界に生起する事態を認識していることを表明する形式をとる。

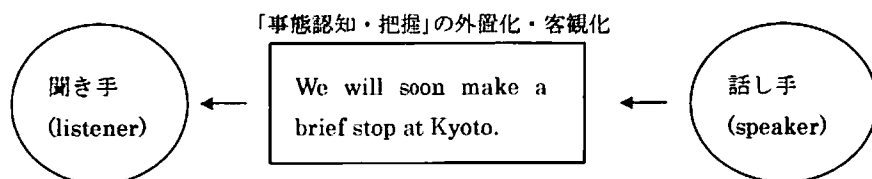
「認知主体(conceptualizer)=主語(Subject)」 $\Rightarrow$ 「事態(state of affairs)」
(動詞)



「認知主体の外部に客観的に存在する世界において事態は生起する」という「主観」の下で、認知主体と認知対象との間に認知的「二項関係」が生じ、この認知的「二項関係」がソシュールのいう言語の線状性の原理に対応することで、SVOの言語形式を生み出し、さらに、「名詞」の「有界性」や「時制」という文法概念の創出を可能にしている。

この「認知主体の外部に客観的に存在する世界において事態は生起する」というパラダイムと「主観(subjectiveness)」に動機づけられた「認知モード(cognitive mode)」で捉えられ、「言語形式(文法)」化された事態は、コミュニケーションの場においては、それ自体が話者と聞き手の中間に位置するものとして、「形式的に客観化された情報」としてやりとりされることに注意を向けおかなければならない。つまり、この「認知モード」で捉えられ「形式(文法)化された事態」は、それ自体、認知主体から独立し、「客観化された形式で、話し手と聞き手の間に存在している」というコミュニケーション・モード(様態)を生み出している。例えば、仕事の出張での帰り、新幹線が京都に近づいた状況での車内でのアナウンスは、日本語では「まもなく京都です。」に対し、英語では「We will soon make a brief stop at Kyoto.」となる。このことは、英語においては「京都に着く」という「事態把握そのものが言語形式(文法)において外置・客観化」され、「外置・客観化された言語形式(文法)を介在にしたモード(様態)」で、コミュニケーションが図られることを意味している。すなわち、英語において「事態認知は外置・客観的に言語形式(文法)化」され、話し手と聞き手の間に投げ込まれる。コミュニケーションは、話し手と聞き手の「あいだ」に、認知主体からは独立した「外置的・客観的に言語形式(文法)化された事態把握」の交換というモード(様態)で図られることになる。このようなモード(様態)が生み出す英語のコミュニケーション形態は、話し手と聞き手が、「事態把握の共同化・共有化が可能」という日本語特有の「主観」に基づくコミュニケーション形態とは根本的に異なる。英語のコミュニケーションという場において、事態の把握は、「外置化・客観化された言語形式(文法)」を、お互いの間に「意味」を運ぶ容器として外置化・客観化する形態で図られる。

英語における会話(コミュニケーション)のモード

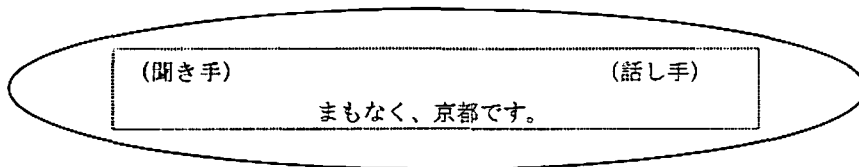


この「認知モード」と「言語形式(文法)」の関係で最も注意しておかなければならないことは、

例えば、「英語において事態を捉えるモードは外置・外観の認知モード」であり、それは事態を舞台の外から観客として観察して捉えたモードであるが、捉えられた結果として「言語形式(文法)」に「主語」として顕れ出てくる「認知主体」は、今度は「言語形式(文法)」上の「主語」として、自らが舞台の中の立つ役者のように、「観察される対象に転化」することである。つまり、事態を捉える「認知主体」は、事態の外側に立って事態を把握しようとするが、捉えた結果として「言語形式(文法)化された主語としての認知主体」は、今度は観察されるべき対象として舞台の上に立ってしまうというアンビバレントな現象が生じてしまう。言語における「意味(事態の把握のされ方)」と「形式(文法)」の関係を会話のテキストレベルで考察するとき、ある「認知モード」で捉えられ、特定の「意味=形式」の関係で顕現化された「事態把握」が、英語においては発話者と聞き手の「間に置かれる」ことで、日本語においては発話者と聞き手を「内包してしまう」ことで、当該言語のコミュニケーションを、その「事態把握(意味)」を可能にしている「認知モード」の「外延」として構造化している現象に注目しておくことは、極めて重要である。つまり、特定言語の「認知モードの外延」が、その言語による「コミュニケーション・モード」にもなっている。

日本語における会話(コミュニケーション)のモード:「事態認知・把握の内包化」

(外枠実線)「認知領域(domain of cognition)」 (内枠破線)「事態把握」と「形式・領域化」



3.3. 内置・同化の認知モード(cognitive mode)と言語形式(linguistic forms)

日本語における「認知モード(cognitive mode)」は、Langacker(1985: 109-150)でいうところのオン・ステージ・モデルのモードであり、中村(2004:3-51)でいうところのIモードである。中村(2004)においては、主客のインタラクションを通しての認識、相手の意図を読むといった認識(間主観的なインタラクション)を意識した上でモデルが提示されている。しかしながら、このモデルにおいてはGibson(1979)で見出されたアフォーダンスの概念及び生態学的認識から見出されたエコロジカル・セルフ(ecological self)の問題をうまく解消することができない。つまり、中村(2004)のモデルにおいては外側の楕円が認知の場を表し、その場に認知主体が入り込む構造になっているが、「認知主体(conceptualizer)」自体が客観的な観察対象として外置化されているモデルは、その実、英語を代表とする言語が持つ「認知モード(cognitive mode)」での事態の捉え直しであり、「仮借された客観世界に認知主体(conceptualizer)が客観的に存在する視点」の外に出ることができていない。中村(2004)で提示されたIモードは、日本語を代表とする「認知モード(cognitive mode)」の解釈に、同じ中村(2004)で提示されたDモードを適用した形となっている。したがって、日本語における事態認知のあり方は、認知の場を外界に仮借し、その場の中

に「認知主体が客観的に外置・存在することを前提としたモデル」では捉えることができない。「内置・同化の認知モード(A モード)」の存在は、原理的に「世界は客観的に存在する」という「主観(subjectiveness)」に動機づけられた英語の「認知モード(D モード)」からは捉えることができない。日本語の「認知モード(A モード)」の存在を捉えるためには、英語を代表とする言語の「認知モード(D モード)」の外に出て、日本語の内部から見出される事態把握のあり方を通して捉える他ない。

日本語においては、「事態」は「認知主体という主観的存在」の「外部」という「主観」に存在するというものではない。日本語においては、「事態」とは「認知主体(conceptualizer)の意識が認知対象と重ね合わせられる」という「主観(subjectiveness)」に内在する。つまり、日本語の「事象認知・事態把握」は、「認知主体」に対する「客観世界」という「分離主観」に動機づけられた「認知モード(D モード)」で「形式(文法)化」される認知メカニズムから生じるのではなく、「認知の場(domain of cognition, or environment)に埋め込まれた認知主体の意識」が「認知対象」に「重なり合う」という、「場における合一主観」に動機付けられた「認知モード(A モード)」で「形式(文法)化」される認知メカニズムから生じる認知現象である。したがって、この「場における合一主観」を動機とする「認知モード(A モード)」においては、「認知主体」に対する「客観世界」という「主観(subjectiveness)」に動機づけられた「認知モード(D モード)」であれば、形式(文法)上「外置化される認知主体」の存在は、「認知主体の意識＝認知領域」という「場における合一関係」を持つことで、「形式(文法)分離」される必要がない。日本語の「認知モード」においては、中村(2004)で提案されている「I モード」の外側の楕円である「認知の場(domain of cognition, context, or environment)」と「認知主体(conceptualizer)」とは、本来分離して存在するものではない。「事態認知の対象に自己の意識を同化させることが可能」とする「主観(subjectiveness)」に動機付けられた「認知モード(A モード)」において、「意識と認知対象の同化」として成立することになる。これこそが、「環境に埋め込まれた認知主体(Ecological Self)」の実相である。

「内置・同化の認知モード(Assimilation mode of cognition)」

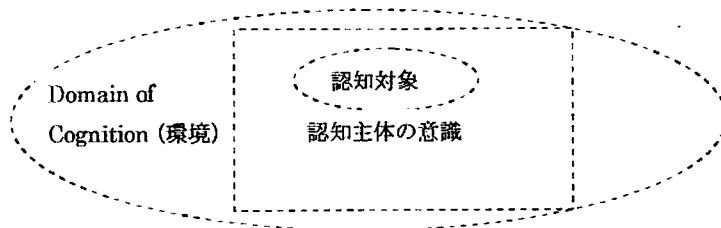
(外枠破線) 「認知領域(domain of cognition)・環境・意味世界」

(内枠四角破線) 「意識と認知対象の同化領域」(Ecological Self) 「述語の認知領域」

(共有化モード・レベル: 主題トラジェクター 係助詞「は」)

(内枠楕円破線) 「認知対象と意識の同化・合一化領域」

(単独モード・レベル: 主体トラジェクター 格助詞「が」)



このモードで見出される事態が「言語形式(文法)」として創出(emerge)されるときには、見出す主体としての「認知主体(conceptualizer)」の存在は、「言語形式(文法)」の中に「形式的・客観的」に現れることを必要としない。すなわち、「認知主体」は「言語形式(文法)」上「主語化」される必要がない。また、この「認知モード(A モード)」においては、「認知対象」に「認知主体の意識」が重なり合うことで「意識と対象が認知的に合一化されるレベルまで主観化」が深まると、その「合一化された認知領域」は意識の中で第1位的に際立つ(salient)ために、英語においては「目的語」として「形式(文法)化」されるものが、日本語においては「内置・内観による認知主体の意識と合一化された認知対象」として、すなわち、「主客合一の主体トラジェクター(trajector)」として、格助詞「が」で「言語形式(文法)化」される。

水を飲みたい。	→ 水が飲みたい。
絵を描きたい。	→ 絵が描きたい。
ジャズを聴きたい。	→ ジャズが聴きたい。
「英語」においては「目的語」、	「英語」においては「主語」に該当。

「認知対象と意識を合一化」しないレベルでの「A モード」単独の事態把握も、「同化の主体トラジェクター(trajector)」として格助詞「が」で「言語形式化」される。

雨が降り始めました。
桜の花が綺麗です。
昔々あるところにお爺さんとお婆さんが住んでいました。

これらの文は、「内置・内観による同化の認知モード(A モード)」が他者と共有されずに、事態が話者のモード内で単独に捉えられたことを表す「現象文」であり、また、単独で捉えた事態に判断が下されたことを表す「判断文」であり、単独で新しい事態の生起を示す「話題提示文」となっている。

日本語においては、「認知主体」の「外部」に存在する「客観世界」という「主観(subjectiveness)」を「言語形式(文法)化」する上で、参照点(reference point)として存在する「主語」は必要とされない。「英語の認知モード(D モード)」においては「目的語」として見出され、「形式(文法)化」されるものが、「日本語の認知モード(A モード)」においては、「主客同化及び主客合一化のトラジェクター(trajector)」として「形式化」されることが可能となる。

本発表の冒頭に記した教室内の生徒とのやり取りを、英語と日本語の「認知モード(cognitive mode)」の違いとして観察してみたい。

中野：そしたら、I found her smart ってどういう意味なん？
生徒：彼女はかしこいってことがわかった。
中野：じゃね、この文で her はどんな役割をしているの？

生徒；主語。

中野；え？じゃ、smart は？

生徒；動詞。

中野；えっ、え？それじゃ、found は？

生徒；う～ん、なんやろ、わかりません。

中野は「英語の認知モード(D モード)」を日本語による事態把握に導入することで、“I found her smart.”という文を、her を「目的語(object)」として、smart を「補語(complement)」として、found を「動詞(verb)」として、I を「主語(subject)」として理解し、その理解を生徒にも要求している。つまり、この文を「彼女はかしこい」と日本語の「言語形式(文法)」で訳出し、「日本語の言語形式(文法)」で事態を捉えながら、生徒には「英語の認知モード(D モード)」を用いて事態を理解することを要求している。しかしながら、生徒の方は自己の持つ「日本語の認知モード(A モード)」での理解に忠実に従い、事態の中心に見出され、認知的な際立ち(prominence)の最も高いher を「彼女は」と、助詞「は」で表される「主題(theme)」として捉え、smart を「かしこい」と「動詞」として捉え、found は日本語の認知モード(A モード)の単独使用で「事態」を「意識化」していることを伝えるものとして、「言語形式」上の「意味」役割を与えていない。こうした考察から、日本語の談話構造を構成するさらに重要な認知的動機が顕になってくる。

3.4. 内置・内観による同化の認知モード(A mode)の共有化

「日本語の認知モード(Assimilation mode of cognition)」のあり方としてさらに重要な本質は、その「認知モード(A モード)」自体が「他者(聞き手)と共有が可能」という「主観(subjectiveness)」を採りえることである。すなわち、「まもなく京都です。」と新幹線でアナウンスされる場合、話者は事態を「内置・内観」することで認知の対象に自己の意識を「同化(assimilate)」させている。しかも、「私達」という主語を省略できることは、「事態認知の対象に自己の意識を同化させることが可能」とする「主観(subjectiveness)」に動機づけられた「内置・内観の A モード」が、聞き手である乗客と共有されることが可能という「主観(subjectiveness)」を前提にできることを示している。つまり、「認知の対象」を「認知主体の意識に内化」させることが可能とする「主観(subjectiveness)」に動機づけられた日本語に特有な「認知モード(A モード)」は、「他者の意識」をも「内置・同化」することが可能という「主観(subjectiveness)」に動機づけられることで、「他者と共有・共同化された A モード(Joint Assimilation Mode of Cognition)」を派生させる。先ほどの生徒の発話にしても、「～であることがわかった」と、「私」という主語を存在させない「言語形式(文法)」で応えることが可能なのは、その事態を捉える「認知モード」が、聞き手である中野と共有されているという認知判断がおこなわれているからである。故に、談話レベルにおける「日本語の認知モード(Joint Assimilation Mode of Cognition)」のモデルは、次のような構造を持つ。

「共有・共同化された内蔵・同化の認知モード(Joint Assimilation Mode of Cognition)」:

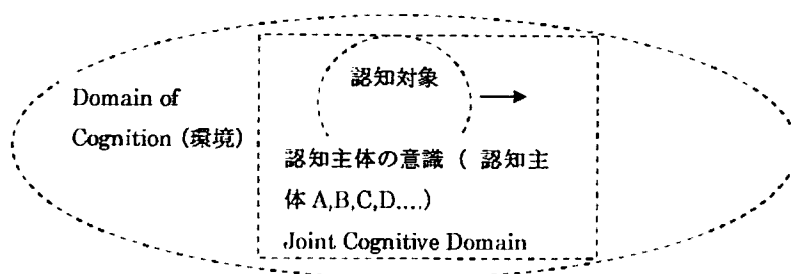
(外枠破線) 「認知領域(domain of cognition)・環境・意味世界」

(内枠四角破線) 「意識と認知対象の同化領域」(Ecological Self) 「述語の認知領域」

(共有化モード・レベル: 主題トラジェクター 係助詞「は」)

(内枠楕円破線) 「認知対象と意識の合一領域」

(単独モード・レベル: 主体(同化・合一化)トラジェクター 格助詞「が」)



格助詞「が」の使用に反映される「認知主体」単独の「認知モード(Aモード)」によって「主体化されたトラジェクター」も、談話の次の段階では、日本語の「内蔵・内観による同化の認知モード(Aモード)」は他者と「共有化される」という「主観」が働くことにより、係助詞「は」によって「共有化モード・レベルでの主題トラジェクター」として「言語形式(文法)化」されると共に、「認知対象領域の共有化」が談話レベルで図られる。

昔々あるところにお爺さんとお婆さんが住んでいました。お爺さんは山に芝刈りに、お婆さんは川に洗濯に行きました。

日本語において、「事態認知の対象に自己の意識を同化させることが可能」とする「主観(subjectiveness)」に動機づけられた「内蔵・内観による同化の認知モード(Aモード)」が、他者と共有・共同化され、この「共有・共同化された同化の認知モード(Joint Assimilation Mode of Cognition)」において、認知対象が「意識に内化」(認知領域化)された状態に置かれると、英語の統語形式における「主語」の存在は言語形式として必要とされない。事態は「主題(theme)」として「形式(文法)把握」され、同時に「共有の認知領域の顕現」が「主観」される。日本語の係助詞「は」は、認知対象が日本語の「認知モード」である「内蔵・内観による同化の認知モード」が共有化された状態で捉えられ、「共有の認知領域の顕現」が「主観」されたと共に「形式(文法)把握」されたことの形式標識(formal marker)である。つまり、係助詞「は」で表される日本語の「主題(theme)」とは、「共有化された認知モード(Joint Assimilation Mode of Cognition)」という「主観」に基づいた「事態把握(意味)」のことであり、また、「共有化された認知モード(これ以降、JAモード)内での共有化された認知領域の顕現」を表している。

ふるさととは遠きにありて思うもの

(『叙情小曲集』「小景異情」室生犀星)

春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは少し明りて紫だちたる雲の細くたなびきたる
(のがよい)。夏は、夜。月の頃はさらなり。 (『枕草子』清少納言)

日本語においては、「事態は認知領域と同化した認知主体の意識の内部に見出される」という「主観」に動機づけられた「認知モード(A モード)」によって、「事態把握(意味化)」がなされる。さらにその「認知モード(A モード)」においては、「他者(聞き手)の意識」をもち「内置・同化」される「認知対象」として「主観される(*subjectified)」がために、「他者(聞き手)の意識」のこの「認知モード(A モード)」内への取り込みをもち仮借され、「内置・同化」及び「他者との共同化・共有化」という「主観性(subjectivity)」を帯びた「認知モード(J A モード)」が出現することになる。この「他者と共に共有化された内置・同化の認知モード(J A モード)」によって、日本語においては「事態把握(意味化)」の「共有化」が「主観化(subjectification)」され、「言語形式(文法)化」とされ、同時に、「共有化された認知領域」の顕現も「主観化(subjectification)」される。この日本語の「認知モード(J A モード)」における係り助詞「は」で「言語形式(文法)化」されたものが、日本語における「主題(theme)・トラジェクター(trajector)」と呼ばれるものである。したがって、日本語における「主題(theme)」とは、「共有化された認知モード(J A モード)」における「事態把握(意味)」という「主観」と、「共有化された認知領域における事象の生起」という「主観」を表すものである。

英語の「外置・外観の認知モード(D モード)」において見出され、「外置・外観化」されることで「言語形式(文法)」上「主語」となる「認知主体」は、日本語の「言語形式(文法)」においては、「客観世界」を参照する参照点(reference point)としての「主語」の意味役割を持つ必要がなく、したがって、「認知主体」は「客観世界」を参照する「主語」として「言語形式(文法)」上に出現しない。「～ってことがわかった」というように、「言語形式(文法)」においては「述語」のみが表れる。「述語の認知領域」が顕現する。また、この日本語独自の「内置・内観による同化の認知モード(A モード)」の適用と「共有化」が徹底されると、「述語」そのものも極限化され、「同化・共有化」の極みである「ことがら(事態・事象) = 認知領域 = 認知主体の意識 = 共有」という「認知形態」に収斂される。ここにおいては、「ことがら(事態)」は外部世界で生起する客観性を備えたもの」としても捉えられるという「主観」の可能性さえも消し去られてしまう。

菜の花や月は東に日は西に	(与謝蕪村)
古池や蛙飛び込む水の音	(松尾芭蕉)
目には青葉 山郭公 初鯉	(素堂)

日本語の「意味」と「言語形式」の関係を創発させる「認知モード」を動機づけている「主観(subjectiveness)」とは、「内置・内観により、認知の対象に自己の意識を同化させる認知モード(A モード)」で捉えられた事象がすなわち世界である」というものである。「事態」は「認知主体の意識」と「同化」することで「概念(意味) = 認知対象領域」として顕現化されるものであり、

* subjectify (造語)主観化する

顕現化された「概念(意味) = 認知対象領域」を「仮借された認知外部領域」へと転移させるような「主観」と「認知メカニズム」は存在していない。日本語における「世界」とは、「認知対象が認知主体の意識に同化されることで、概念(意味) = 認知対象領域として顕現化される」ものである。一方英語においては、「認知主体の意識と同化することで概念(意味)化 = 認知対象領域化」された「事態」は、「世界は認知主体の外部に客観的に存在する」という「主観(subjectiveness)」によって「仮借の外部領域」へ転移させられ、転移させられることによって、「認知主体の意識」の「外部」に仮借された「認知対象領域」が出現することになる。しかしながら、ここにおいても、「世界は認知主体の外部に客観的に存在する」という「認知主体」の「主観」をフィルターにして、「意識の二重構造化」の中で「世界」を仮構させているだけで、「世界」そのものを「認知主体」の「外部」に「客観的」に出現させることに成功しているわけではない。それはちょうど、人間は「時間」そのものを直接捉えることができず、運動・変化という事象を通してのみ「時間」を「形式(文法)化」できるのと同じ原理である。人間は、「世界」そのものを直接捉えることはできず、「世界の存在(意味)」は、「認知主体」が持つ「主観」に動機づけられた「認知モード」により、「事態の把握のされ方 = 概念(意味) = 言語形式」という関係としてのみ創発(emerge)され、具現化(embodied)される。

繰り返しになるが、日本語において係助詞「は」は、「事態」が「主題(theme)」として、日本語特有の「内置・内観による同化」と「他者との共同・共有化」に主観づけられた「認知モード(JAモード)」によって捉えられ、「認知領域」として顕現化されると同時に、「言語形式(文法)化」されていることを示している。これに対して、格助詞「が」は、「事態」が「内置・内観による同化の認知モード(Aモード)」で捉えられてはいるが、その「認知モード」は他者とは共有されていないことを示す形式標識(marker)となっている。

日本語の「内置・内観による同化の認知モード(Aモード)」での事態の把握のされ方をまとめると、このモードにおいては、「認知領域(domain of cognition)」と「認知主体(conceptualizer)の意識」とは「同化」しているので、「認知主体」は「言語形式」において「外部・客観世界」を認知する参照点として、この領域の外部に「主語」化される必要はない。これが、Neisser(1988, 1991, 1993a, 1997)が述べる「エコロジカル・セルフ(ecological self)」の実相であり、この認知メカニズムにおいては、「事態把握」の際に「認知対象」は「認知主体」と「二項関係」を持たない。したがって、この認知メカニズムとソシュールが言うところの言語の線状性の原理が組み合わさることで、「認知対象」の後に「述語」が続く「述語後置の言語形式」が創発される。また、「認知の対象」となるものも「認知モード(Aモード)」内で「内置・内観」されることで、「認知主体の意識」と「合一化」するレベルまで「主観化」され、「認知主体の意識と合一化した認知領域(「主体トラジェクター」)」が顕現化(「言語形式化」)される。これが、西田幾多郎の語る「場における合一」、「主客合一的な認識」の実相である。この認知メカニズムにおいては、「認知対象」は、「内置・内観」により「認知主体の意識」に「合一化」されたものに転化するため、「世界が外部に客観的に存在する」という「主観」に動機付けられた「認知モード(Dモード)」によって創発された「言語形式(文法)」においては、「目的語」として「言語形式化」される「認知対象」が、格助詞「が」の使用で「主客合一の主体トラジェクター」として「言語形式(文法)化」さ

れる。つまり、英語においては「目的語」となる「認知対象」が、日本語においては「主客合一の主体トラジェクター」として、「主体(英語の主語)」であり、かつ「客体(英語の目的語)」であるものとして把握される。この「合一」という認知現象は、「主観化の最深レベル」での認知現象と言える。

リンゴを食べたい。 → リンゴが食べたい。
 パット・メセニーを好き。 → パット・メセニーが好き。
 英語で言うところの OV 語順 → 英語で言うところの SV 語順

「事態を構成する中核の事象(名詞・こと)」が、「共有化」されていない「内置・内観化による同化の認知モード(A モード)」で捉えられたときには、格助詞「が」の使用で「主体トラジェクター」として「言語形式(文法)化・単独領域化」され、「他者との共有による内置・内観による同化の認知モード(J A モード)」によって捉えられたときには、係助詞「は」の使用で「主題トラジェクター」として「言語形式(文法)化・共通領域化」される。「共有主観」の「J A モード」で捉えられ、係助詞「は」で「主題トラジェクター」として「言語形式(文法)化」された「認知対象 = 認知領域」は、格助詞「が」で捉えられた「主体トラジェクター」が「認知領域」に顕現化し、「事態把握」を「主体」として図る際には、英語でいうところの「目的語」の「意味役割」に転化することにもなる。

この自転車は、彼女が1週間前に買いました。
 水と空気と太陽は、生きるもの全てが必要とします。

さらに、事態の把握を図る際に、この「認知モード(A モード)」の「共有化」と「認知対象と認知主体の意識の同化」の徹底化が図られると、「言語形式」上の「述語」自体も姿を消して行く。

(夏が近づき、) 目には青葉(が美しく)、山(には)郭公(が鳴き)、初鯉(がおいしい)。

↓

目には青葉 山郭公 初鯉 (素堂)

3.5. 主観(subjectiveness)度のレベル

日本語の「内置・内観による同化の認知モード(A モード)」は、コミュニケーションを成立させる「場」として「他者と共有することが可能」という「主観」を受け入れた「認知モード(Joint Assimilation Mode of Cognition)」に拡張される。したがって、この「認知モード(J A モード)」の共有化」が徹底されると、前節で見たように「主語」はもちろん、「助詞」及び「述語」までもが「言語形式(文法)」から消えることになる。また、このような「認知モード(A モード)」とその共有化」は、「動詞」に対しても認知的な「意味(事態把握の仕方)」の変容をもたらす。本来、事象を構成する項(「意味役割を持つ参与体」)間の関係に対する認知判定が、「動詞」が表す「意味

(事態把握の仕方)」であるが、その「認知判定」には「認知主体」の心理要因(願望・期待・推測等)が反映・同化させられやすい。「認知主体」の心理要因(願望・期待・推測等)を反映・同化することで「主観化(subjectification)」された「動詞」は、「動詞」という文法概念から「モーダル(modal)」という文法概念・形式に転化してゆく。「動詞」という文法概念・形式から「モーダル(modal)」という文法概念・形式を派生させる日本語における「主観化」のレベルを深化させる認知のメカニズムは、一方において、英語の「時制(tense)」という文法概念・形式とは異なる、独自の「時」の文法概念と文法形式を創発・具現化させている。日本語においては、英語の「時制(tense)」に該当する過去時制・未来時制は存在していない。

澤田(近刊, 2006)では、授受動詞「くれる」・「やる」が「主観化」を通して、「モーダル」化されるプロセスが意味的・統語的基準との関係で次のようにまとめられている。

- (71) 第 I 段階: X ガ Y ニ Z ヲ クレル/テヤル
 第 II 段階: Xi ガ Y ニ [Xi ガ Z ヲ V] テクレル/テヤル
 第 III 段階: Xi ガ [Xi ガ---V] テクレル/テヤル
 第 IV 段階: [(X ガ)---V] テクレル/*テヤル

澤田(近刊, 2006)

表 1 意味的・統語的基準と授受動詞「くれる / やる」の主観化のプロセス

	第 I 段階	第 II 段階	第 III 段階	第 IV 段階
基準 A: 物の授受性	○	△	×	×
基準 B: 主語の意図性	○	○	○	×
基準 C: 動詞の制約		作成 / 獲得動詞 OK	意志動詞 OK	無意志動詞 OK (ただし、状態動詞は判断が揺れる)
基準 D: 項の数	3	3	2	1
用言性の度合い	濃い ←	-----	----- →	薄い
意味内容	より客観的 ← (より命題内容)	-----	----- →	より主観的 (より命題外的)
「やる」の主観化の進展	-----	-----	----- →	
「くれる」の主観化の進展	-----	-----	-----	----- →

澤田(近刊, 2006)

この表に従えば、

会議に間に合ってくれ。

雨が止んでくれ。

などの文は、日本語の「内置・内観により認知の対象と自己の意識が同化する認知モード(A モード)」の根底レベルでの事態把握が行われているため、「認知主体」は agent として「言語形式」に現れる必要もなく、元々「授受」関係を表していた動詞「くれる」が「認知主体」の奥声である「祈願」にまで「主観化(subjectification)」・「モーダル(modal)化」されていることになる。一方、「やる」の方は、

(私が)教えてやった通りにしなさい。

太郎は本を次郎にくれてやった。

などのように、「内置・内観による同化の認知モード(A モード)」で事態を捉えながら、まだ agent の存在を必要とするレベルでの「主観化(subjectification)」・「モーダル(modal)化」のあり方を表している。このように、日本語の「内置・内観により認知対象に認知主体の意識を同化させる A モード」によって事態は捉えられるとする主観(subjectiveness)」にも、語彙及び構文のレベルで差(階層性)があることが観察される。こうした「主観(subjectiveness)」度のレベルの判定については、「言語形式(文法)」における事態を構成する参与項の数が目安のひとつになるであろう。「主観化(subjectification)」の度合いが強ければ強いほど、「言語形式(文法)」において事態認知を構成する参与項の数は少ないはずである。また、このモードによって認知した事態を「共有化された認知モード(J A モード)」に取り入れるために、「認知モード」を変換させるメカニズムが日本語の中に潜んでいることが予測される。

彼女が昨日出発したっていうことは本当でしょうか？

彼が大学院の試験に合格したなんてありえへんよね。

ヤツがハジキをぶつ放したのは娘を守るためだったんだ。

4. 英語における「言語形式」の破綻：「内置・内観による同化の認知モード(A モード)」による英語の「文型の意味変容」

4.1. 英語における「言語形式」と「内置・内観による同化の認知モード(A モード)」

Taylor(1995, 2002)においては、次のような構文が問題にされている。

My guitar broke a string. (私のギターは弦が切れた)

The stove has blown a fuse. (このレンジはヒューズが飛んだ) (Taylor 1995:214-5)

My car burst a tire. (私の車はタイヤがバーストした) (Taylor 2002:576)

英語の文レベルにおいて、認知的際立ち (prominence) が高く第 1 に注目される参与体はト

ラジエクター(trajector)と呼ばれ「主語」として表され、その次に際立ち(prominence)の高い第 2 に注目される参与体はランドマーク(landmark)と呼ばれ「直接目的語」で表される。英語の動詞 break の意味構造が「x が y に働きかけて、y を割れていない状態から割れた状態へ状態を変化させる」とするならば、My guitar broke a string において、主語は my guitar であり、直接目的語は a string である。しかしながらこの文において、break が「x が y に働きかけて、y を割れていない状態から割れた状態へ状態を変化させる」という「他動詞」としての文法概念(意味: 事態の把握の仕方)を持つものとは考えることができない。むしろ、日本語への翻訳において事態(意味)がうまく捉えられるように、(ギターの弦が切れた)という「自動詞」としての文法概念(意味)を持つものと考えられるべきであろう。そして、この break が「自動詞」という文法概念(意味)に範疇化されるべきものならば、「自動詞」は参与体を 1 つしかとれないから、「自動詞」が「主語」と「目的語」という 2 つの参与体をとるこの文は、英語における文型の根本原則(統語規則)を破っていることになる。Taylor(1995:214-5, 2002:576)で言及される他の 2 文についても同様である。こうした言語事実は、英語における文という「言語形式(文法)」内に見出される「動詞」の「意味構造」や構文内の「各項の意味役割」からの視点では、説明・解明のしようのない言語現象が、英語という言語内で生じていることを物語っている。すなわち、「意味(事態の把握の仕方)」と「言語形式(文法)」の結びつきを英語という言語体系において創発させている「認知モード(D モード)」、つまり、「言語とは認知主体の外部に客観的に存在している世界を捉える認知活動の形式化である」という西洋言語のパラダイムでは捉えきれない、また、説明しえない「事態把握(意味)」のあり方が、英語の「言語形式(文法)」の中でも生じていることを、これらの文は示している。そして、それは同時に、異なる「主観」に動機づけられた「認知モード(A モード)」による「事態把握(意味)」のあり方が、英語の「言語形式(文法)」の変容を迫っていることを、これらの文は物語っている。

My guitar broke a string.	(私のギターは弦が切れた)	
The stove has blown a fuse.	(このレンジはヒューズが飛んだ)	(Taylor 1995:214-5)
My car burst a tire.	(私の車はタイヤがバーストした)	(Taylor 2002:576)

これら英語の文で形式化されている「事態把握(意味)」のあり方を、日本語の「認知モード(A モード)」で捉え直してみれば、「内置・内観」によって認知的に際立つ(salient)ものが「主題トラジエクター」として「意識化」され、「領域化」される。この事態において、まず際立つものは、部分を含む全体である guitar なり、stove なり、car である。部分を含む全体が、「共有化された内置・内観による同化の認知モード(JA モード)」における事態把握の「主題トラジエクター」として、「認知主体の意識と同化」されることで、係助詞「は」の使用で「言語形式(文法)化・認知領域化」される。その「意識化された領域」の中でさらに「意識と合一化」された「認知対象」が、「単独の内置・内観による同化の認知モード(A モード)」における事態把握の「主体トラジエクター」として、格助詞「が」の使用で「言語形式(文法)化・認知領域化」される。その後、このモードで捉えている事態の解釈として、「主体トラジエクターの事態判断」が述語「自動詞」

として「主体化(subjectification)・言語形式(文法)化」される。ただし、このプロセスを英語の「言語形式(文法)」に反映させると、英語の「言語形式(文法)」が破綻するため、「共有モードで捉えられた主題トラジェクター」を「主語」として、「単独モードで捉えられた主体トラジェクター」を「直接目的語」として、「主体トラジェクターの事態判断」を「他動詞に変容」させる認知プロセスを介在させる形態で「言語形式(文法)化」することで、英語においては「形式(文法)」保存が優先されている。

上記の英語の中間構文においても、(私のギターは弦が切れた)、(このレンジはヒューズが飛んだ)、(私の車はタイヤがバーストした)と、事態を「内置・内観による同化の認知モード(A モード)」で捉えながら、それを「主体化(subjectification)」するための言語形式(文法)は、「世界は客観的に存在するという主観(subjectiveness)を具現化した言語形式」として固定化されてしまっているがために、この事態における認知判断を英語の「言語形式(文法)」に反映しようとする、「形式(文法)」の破綻・崩壊を招く。「客観」という「主観」によって動機づけられている「認知モード(D モード)」を用いて「事態の把握」を図りながら、「客観」という認知パラダイムにより構成されている言語原理を形式的に徹底化させると、「事態把握(意味)」と「形式(文法)」の結合関係において自己矛盾が生じ、その結合関係が「形式・文法」面において崩壊する現象を見せることを、これらの文は物語っている。世界を客観的に形式化すること、つまり、「事態の客観的な把握」という主観を徹底的に言語形式化すれば、その言語形式は崩壊する現象を見せる」ことを、これら「周辺の(peripheral)」と呼ばれる英語の中間構文は物語っている。「中核(core)」が「中核」として存立する理由を知るためには、「周辺」に隠されている謎を解かなければならない。

英語の「言語形式(文法)」において、上記例文の a string や a fuse や a tire は形式上目的語になっているが、日本語の「内置・内観による同化の認知モード(A モード)」を用いた事態把握においては、格助詞「が」が用いられる「主体トラジェクター(単独モードによる認知対象と認知主体の意識が同化したトラジェクター)」であるため、broke や has blown や burst は、英語の「言語形式(文法)」上の「他動詞」から、日本語の「内置・内観による同化の認知モード(A モード)」を用いた「主体トラジェクター」の事態把握である「自動詞」の「事態把握・意味(文法概念)」を保持したままなのである。日本語の格助詞「が」で表される「文法概念(意味)」は、英語の認知モードである「D モード」において、「主語」及び「目的語」として捉えられる対象を「合一化」させたもの(「主体トラジェクター」)にすることが可能となり、単純に英語の「主語」に還元することはできない。むしろ、「主語」という「文法概念」は、「世界は客観的に存在するという主観」を具現化した「言語形式」における参照点(reference point)として、西洋の言語形式に特徴的に存在していると言える。日本語の格助詞「が」で表される「文法概念」は、日本語の認知モードである「A モード」が捉えた英語における「目的語」となり、「主語」となる、両義的な存在としての「合一化(主体化)された主体トラジェクター」の場合があることを理解しておくことが重要であろう。

英語を英語として成立させるパラダイムと「主観(subjectiveness)」からは、Taylor(1995:214-5, 2002:576)において提示されている中間構文における「形式(文法)」の破綻の原因とメカニズムは説明できない。つまり、英語の動詞・構文内の意味構造や各項の意味役割を以てしては、英

語の中間構文における言語形式の破綻の現象を説明することはできない。もちろん、言語における統語規則(文法)の自律性を説く立場からも、説明することはできない。

4.2. 英語における「内置・内観による同化の認知モード(A mode)」の主体化(subjectification)

Langacker の「主観化/主体化(subjectification)」と「文法化(grammaticalization)」の概念で捉えられた動詞 have の用法を、再度検討することにしてみよう。

- a. *Be careful—he has a knife!* [source of immediate physical control]
彼はナイフを所持している。
 - b. *I have an electric saw (but I seldom use it).* [source of potential physical control]
私は電動ノコギリを所有しています。
 - c. *They have a good income from investments.* [locus of experience, abstract control]
彼らは投資から十分な収益がある。
 - d. *They have three children.* [locus of social interaction, generalized responsibility]
彼らには子どもが3人いる。
 - e. *He has terrible migraine headaches.* [passive locus of experience]
彼はひどい偏頭痛持ちだ(悩まされている)。
 - f. *We have some vast open areas in the United States.* [locational reference point, diffuse locus of potential experience]
アメリカには広大な未開拓地がある。
- (Langacker 1999a: 307)

日本語の事態把握は、「内置・内観による同化の認知モード(A モード)」によって行われる。ここにおいては、「認知主体の意識」と「認知対象」は「同化」すると「主観」されることで、「認知対象と認知主体の意識が同化・合一化したトラジェクター」が顕現化される。これは、「同化(主題化)・合一化(主体化)されたトラジェクター」としての「認知領域」が顕現化されたことを意味する。顕現化された「主題(同化)・主体(合一化)トラジェクター」は、顕現化された状況の、つまり、「認知領域化」された状況の認知判断を行う。「認知対象と認知主体の意識が同化(主題)・合一化(主体化)したトラジェクター」が「認知領域化」された状況の認知判断を行うために、「認知主体」は、事態を認知する上での参照点の役割を果たす「主語」として、「言語形式(文法)」上に現れる必要はない。英語という言語は、事態が「世界は客観的に存在するという主観」により成立している「外置・外観の認知モード(D モード)」によって捉えられ、それが、「意味 = 事態把握の仕方」と「形式 = 文法」の結合として創出(emerge)・具現化(embodiment)される言語である。したがって、「客観的世界」を認識する参照点(reference point)として、「認知主体」が「言語形式」の「主語」の位置に現れる必要がある。ところが、「世界は客観的に存在するという主観」によって成立している外置・外観の認知モード(D モード)」によって捉えられた事態が「言語形式(文法)」化されている英語に、「認知主体」にとっては本来認知的に自然である「内置・内観による同化の認知モード(A モード)」による事態把握が投影された場合には、英語の「言語形

式(文法)」の「主語」の位置に現れる参与体は、その「意味」内容を希薄化させると共に、「動詞」本来の意味も、共有化されやすい存在や関係を表す「意味」内容に、または、「認知主体」自体が影響を受けることを表す「意味」内容に、「主観化(subjectification)」されることになる。

- f. *We have some vast open areas in the United States.* [locational reference point, diffuse locus of potential experience] アメリカには広大な未開拓地がある。

上記 f の例文においては、「主語」位置の参与体である we の「意味」は極限まで希薄化されており、また、「動詞」have の本来の「意味」は、共有化されやすい事態認知である関係・存在の「意味(〜がある)」内容にまで、「主体化(subjectification)・文法化(grammaticalization)」されている。

こうした事象を英語の構文レベルで見ると、take, cost などは「主語」である「認知主体」自体が影響を受ける「意味」内容を表す「動詞」であるため、元々「内置・内観による同化の認知モード(A モード)」で捉えられるべき事態を反映する「言語形式(文法)」に馴染むものである。したがって、「内置・内観による同化の認知モード(A モード)」によって捉えられた事態を表す「形式(文法)」に馴染むものであるために、英語の「言語形式(文法)」上の「主語」位置に現れるものは極限まで「意味」内容が希薄化される必要がある。そして、動詞 take, cost は「認知主体」自体が直接影響を受ける事態をあらわす「意味」内容に、日本語に置き換えるならば「〜はかかる」という「自動詞」の「意味」内容を持つレベルにまで、「主体化(subjectification) / 文法化(grammaticalization)」される必要がある。

It took me four weeks to complete my thesis. (論文を完成させるのに私は四週間かかった)

It cost us \$10,000 to fix our car. (車を修理するのに私は 1 万ドルかかった)

英語の構文レベルにおいても、Taylor(2002:Ch.28)によって構文イディオム(construction idiom)と呼ばれる特異な構文の数々は、「内置・内観による同化の認知モード(A モード)」で見出された事態を、英語の「言語形式(文法)」を用いて創発・具現化することによる「形式矛盾」という視点で研究されることが必要となるだろう。Goldberg (1995)の『構文文法論』を、徹底した構文主義でないと批判した Croft は、構文から名詞、動詞、形容詞などの品詞が派生する視点を打ち出しているが(Croft 2001:Ch.2)、「名詞」、「動詞」、「形容詞」などの品詞も、特定の「認知モード」によって事態が特定の「言語形式(文法)」に創発・具現化されるプロセスと結果という視点で再考する必要がある。また、構文(スキーマ)主導による構文構築という構文主義は、元の構文と新たな構文との関係を記述することは可能であろうが、構文から新たな別の構文が創発されるメカニズムや動機を説明することはできない。動詞主導及び構文主導という視点以外の捉え方が必要である。

4.3. 「内置・内観による同化の認知モード(A mode)」による英語の「文型の意味変容」

ここまで見てきたことから、次のようなことが理解される。「事態認知の対象に自己の意識を同化させることが可能」とする「主観(subjectiveness)」に動機づけられた「内置・内観による同化の認知モード(A モード)」においては、見出された「認知対象」は「認知主体の意識」と「同化」することにより、「同化(主体化)されたトラジェクター」として、英語の「目的語としての意味役割」から「主語としての意味役割」を担うようになる。また、この認知モードにおいては、「動詞の意味内容」は「目的語が主語へと意味役割の変容」を受けるのに伴い、「他動詞」から「自動詞」へと「意味内容の変容」も受けて行く。Langacker (1999a: 307)に提示されている「動詞」have の用法について、このことを再度まとめてみる。

- a. [source of immediate physical control] 彼はナイフを所持している。
- b. [source of potential physical control] 私は電動ノコギリを所有しています。
- c. [locus of experience, abstract control] 彼らは投資から十分な収益がある。
- d. [locus of social interaction, generalized responsibility] 彼らには子どもが3人いる。
- e. [passive locus of experience] 彼はひどい偏頭痛に悩まされている(持ちだ)。
- f. [locational reference point, diffuse locus of potential experience]

アメリカには広大な未開拓地がある。

(Langacker 1999a: 307)

	主語 性		他動詞 性	自動詞 性		目的語 性
He	○	has	○	×	a knife.	○
I	○	have	○	×	an electric saw.	○
They	△	have	△	△	a good income from investments.	△
They	△	have	△	△	three children.	△
He	△	has	△	△	terrible migraine headaches.	△
We	×	have	×	○	vast open areas in the United States.	×

この表からは、英語における「主語(subject)」、「他動詞(transitive verb)」、「目的語(object)」という概念を用いることによって範疇化した文型区分は、表における上位二層程度にしか適用できない事実が判明する。英語において、S「主語」+ Vt「他動詞」+ O「目的語」という文型形式を持つ文も、事態がどの認知モードによって捉えられているかを観察することで、「形式(文法)」上の妥当性を保持しているのかどうかを判別できる。

Taylor (1995:214-5, 2002:576)と Clark(2001:396-7)に挙げられている中間構文の「動詞」もこの視点から観察してみれば、

My guitar broke a string. (私のギターは弦が切れた)

The stove has blown a fuse. (このレンジはヒューズが飛んだ) (Taylor 1995:214-5)

My car burst a tire. (私の車はタイヤがバーストした) (Taylor 2002:576)

That flower cuts. (庭の花を見て2歳8ヶ月の子どもが「あの花は切れるよ」)

→ We can cut that flower. (Aモードにより、「目的語」が「主語」位置に来る)

This can't squeeze. (硬いゴム製の小さなオモチャを握りながら「これは握りつぶせない」)

→ I can't squeeze this. (Aモードにより、「目的語」が「主語」位置に来る)

(Clark 2001:396-7)

	主語 性		他動詞 性	自動詞 性		目的語性
My guitar	×	Broke	×	○	A string.	×→(主語性)
The stove	×	Has blown	×	○	A fuse.	×→(主語性)
My car	×	Burst	×	○	A tire.	×→(主語性)
That flower	△	cuts.	×	○		△
This	△	Can't squeeze.	×	○		△

と分析できる。

Clark(2001:396-7)で提示されている構文の存在は、日本語の「事態認知の対象に自己の意識を同化させることが可能」とする「主観」に動機付けられた「内置・内観による同化の認知モード(Aモード)」において、「目的語」として見出された「認知対象」がそのまま英語の「言語形式(文法)」上の「主語」となり、「認知対象」が「目的語」から「主語」へと「意味変容」するに伴って、「他動詞」が「自動詞」に「意味変容」している例である。英語の中間構文と呼ばれるものの多くは、「事態認知の対象に自己の意識を同化させることが可能」とする「主観」に動機づけられた「内置・内観による同化の認知モード(Aモード)」で捉えられた事態が、英語の「言語形式」の中で創発・具現化されたものであることが解る。このことから、「主語」という文法形式で範疇化されている概念は、少なくとも「世界は客観的に存在するという主観を基盤にした外置・外観の認知モード(Dモード)」による場合と、「事態認知の対象に自己の意識を同化させることが可能」とする「主観」に動機づけられた「内置・内観による同化の認知モード(Aモード)」による場合とでは、創発・具現化のメカニズムが異なることが理解される。すなわち、英語における「主語」とは、事態は外部に客観的に生起するという「主観」を「言語形式(文法)」に反映するための参照点としての存在であり、この意味において「客観主観主語」(参照点主語)という「意味役割」を持つ。一方、日本語においては、「事態認知の対象に自己の意識を同化させることが可能」とする「主観」によって、「認知対象と認知主体の意識が同化・合一化された認知領域(トラジェクター)」として創発・具現化される存在であり、この意味において「同化(主題)/同化(主体)/合一化(主体)のトラジェクター」という「意味役割」を持つ。その結果、英語において「目的語」となるものが、日本語においては英語の「言語形式」上の「主語」位置に来る「合一化(主体)トラジェクター」として、「認知領域」の「事態把握(意味)」を構成する。

あなたを好き。→ あなたが好き。

I love you.

ここでの格助詞「が」によって「言語形式化」された「認知対象」は、事態は認知の対象に自己の意識を同化させることで捉えられるという「主観」に基づき、「認知対象＝認知主体の意識＝認知領域」という関係に「合一することで主体化したトラジェクター」として、英語の「言語形式(文法)」における「目的語」であり、かつ、英語で言うところの「主語」となる、両義的な「意味役割」を持つ存在に転化している。係助詞「は」で見出された「認知対象」は、格助詞「が」で見出された「認知対象」のように両義的な「意味役割」を持つことはできない。係助詞「は」で見出された「認知対象」、すなわち、「事態は認知の対象に自己の意識を同化させることで捉えられるという主観」は、「他者と共有が可能である」という二重の「主観」によって捉えられた、「主題(theme)トラジェクター」として「言語形式(文法)化」された「認知領域」である。

春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは少し明りて紫だちたる雲の細くたなびきたる(のがよい)。夏は、夜。月の頃はさらなり。
(『枕草子』清少納言)
菜の花や月は東に日は西に
(与謝蕪村)

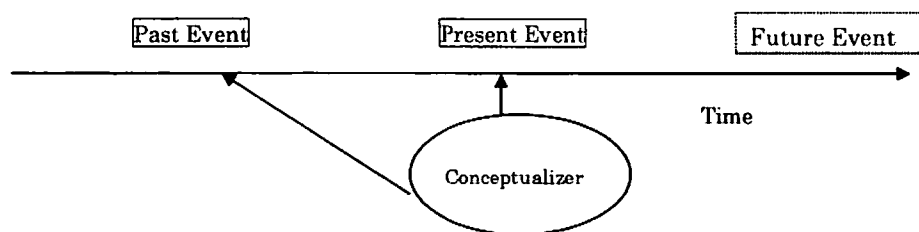
以上のことから、「主語」という文法概念は、言語にとって一律の「意味役割」を持つものではないことが判る。「世界は客観的に存在するという主観を基盤にした外置・外観の認知モード(Dモード)」によって、「言語形式(文法)」の中で参照点(reference-point)として位置付けられる「主語」の存在と、「JAモード」によって、言語形式の中で「同化・主題トラジェクター」として、及び「Aモード」によって「同化・主体トラジェクター」として位置付けられる存在である。さらに、日本語の「同化・主体トラジェクター」は、「認知対象と認知主体の意識の合一化」のレベルまで「主観化」されると、「合一化・主体トラジェクター」として、「認知対象(英語の目的語)」でありながら、「認知主体(英語の主語)」という「意味役割＝文法形式」を持つようになる。したがって、日本語における「主語」を厳密に定義した場合、英語における、「世界は客観的に存在するという主観を基盤にした外置・外観の認知モード(Dモード)」による「参照点(reference-point)としての主語」は存在していない。

5. 「認知モード(cognitive mode)」と「時間」:「時制(tense)」言語と「確定叙述(determinative description)」言語

5.1. 英語において「現在形」と「過去形」が構成する「時制(tense)」概念

言語における「主語」の形式化問題と同じように、言語における「時間」の形式化問題にも「認知モード」は深く関与している。「世界は客観的に存在するという主観(subjectiveness)に動機づけられることによって成立している外置・外観の認知モード(Dモード)」に捉えられた「時間」とは、「仮借された認知主体の外部領域」に、「事態把握」が一方向・一直線状に、客観的に個別化された「イベント」として、「認知空間」に順次配置されることによって創発・形式化される

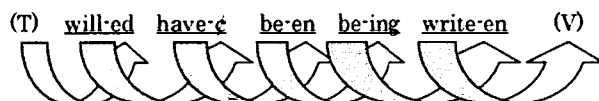
ものである。したがって、「認知主体」は自身の「外部」に、一方向・一直線に流れる「客観的存在として時間領域」を仮借する D モードの認知様式を用いるために、次のような認知図式を具現化できる「言語形式(文法)」を選択する必要が生まれる。



このような認知図式を表現する「言語形式」が、「時制(tense)」と呼ばれる概念であり、英語においてこの「時制(tense)」という文法概念が成立するのは、「認知主体の外部領域に、事態把握が個別化されたイベントとして、一方向・一直線の形態で空間的に配置される」という「主観」に動機付けられた「認知モード (D モード)」で、「時間把握」が行われるからである。一方向・一直線という形態が前提とされるゆえに、現在の視点から「ある時点」、「ある時点以前・以降」、「ある時点からある時点までの時間幅」というような、時間を一次直線に置き換えた上での認知的切り取りが可能となる。その結果、織田 (1990:103)が指摘するように、「時制」に関わる「述語動詞」を構成する各カテゴリーは、

Tense	(Modal)	(Perfect)	(Progressive)	(Passive)	V、
$\left\{ \begin{array}{l} \cdot (s) \\ \cdot ed \end{array} \right\}$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{will,} \\ \text{shall,} \\ \text{etc.} \end{array} \right\}$	$+ - \phi$	$(\text{have} + \cdot en) (\text{be} + \cdot ing)$	$(\text{be} + \cdot en)$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{write,} \\ \text{see,} \\ \text{etc.} \end{array} \right\}$

という形態構造を持ち、‘would have been being written’のような述語動詞は、



織田 (1990:103)

のように分析されることになる。ここで気をつけておかなければならないことは、英語における「時制」も歴史的にも「現在形」と「過去形」が基本であり、未来は日本語と同じように「現在形」で表現されていたことである。そのなごりが、「時・条件の副詞節の中と近接未来の現在形」である。また、「今は行われているがやがて終わる」ことを含意する「現在進行形」が、一方向・一直線という時間認知の形態に対応させられると、方向性と幅が形状派生することから、「現在進行形」も未来表現として用いられる。

If it rains tomorrow, we will stay home.

Tomorrow is Kate's birthday. I and my wife are going to have a party for her.

I'm leaving for Sapporo next month.

Who is coming to our dinner tonight, Mom?

英語の will, shall で表される「未来」という概念は、認知図式で客観的な「外部存在」として見出されて、一方向・一直線の主観からなる「認知空間」の後方に配置された「事態把握」に対する、対概念として恣意的に見出されたものと言える。未来のことは、近接的に「確定だと予測される」こと以外は誰にもわからず、「推量・推測」や「意志」等に関わる表現形式(モーダル)を以てしか表すことができない。したがって、英語における過去との対比において will, shall を用いることで見出される未来は、「推量・推測」及び「意志」に関わる表現形式(モーダル)に収斂される概念であり、この意味において未来は「動詞の変化」によって「言語形式化」される「時制(tense)」ではなくて、「法(modality)―叙述内容に対する話者の心的態度の文法的表現」であると規定できる。

5.2. 日本語において現在形と確定叙述(「た」)が構成する「時の概念」

日本語の「事態認知の対象に自己の意識を同化させることが可能」とする「主観」に動機づけられた「内置・内観による同化の認知モード(A モード)」で捉えられる「時」は、認知主体の「外部」に一方向に向かって一直線状に「客観的」に存在するものではない。「内置・内観の認知モード」により「顕現化」された「認知領域」における「事態把握」は、常に今ある「認知主体の意識」を以て行われる。したがって、この認知モードを用いた「事態把握」は、「時制」という文法概念を用いるならば「現在形」の「事態把握」が基本であり、英語の「言語形式」において「未来時制」と規定される「認知領域」での「事態把握」も、日本語においては、今ここにある「認知主体の意識」に引き寄せての「把握」であり、したがって、使われる「時制」は「現在形」となる。

3日後に参ります。(I will come to see you three days after today.)

天気予報によると、明日は晴れです。(According to the weather forecast,
it will be fine tomorrow.)

そして、引き寄せた「事態」に「認知主体の現在の意識」が確信を持ってない場合は、「推量」や「推測」の「言語形式」で「事態判断」がなされることになる。

来月の今頃は、ハワイの海で泳いでいるだろう。(I will be swimming in the sea of Hawaii
this time next month.)

ハレアカラの山頂から見る星は、きれいかもしれない。(The stars seen from the summit of
Mt. Haleakala would be beautiful.)

したがって、日本語においても「未来」とは、引き寄せた「事態」に「確定」の判断・把握が行えるならば「現在形の言語形式」で表される「認知領域」であり、「確定」の判断・把握がなされないならば、「推測・推測(モーダル)の言語形式」で表される「認知領域」である。

日本語においては、「過去」においても同様のことが言える。すなわち、「認知主体の現在の意識」に引き寄せた「事態」に対して、「意識の重ね合わせの経験」の確認が取れた場合は、「確定叙述」の「た」が用いられる。したがって、現在の日本語においては、明確な「過去時制」という文法概念が存在しているわけではない。「確定叙述」の「た」を用いた表現に対して、「過去時制」という文法概念を対応させるのは、誤謬である。日本語の「た」は、「認知主体の現在の意識」が引き寄せた「事態」に対する、「意識の重ね合わせによる事態把握経験の確認表現」である。日本語における認知主体の「時の把握」の仕方も、「事態」を「認知主体の意識と同化した認知領域」内に取り込むことで、「認知対象と認知主体が同化・合一化した言語形式(文法)」を顕現化する認知メカニズムによって図られるものであり、「事態は認知主体の外側に客観的に存在する」という「主観」によって構造化されている英語の「認知空間」から派生している「時制(テンス)」という文法概念とは、根本的に次元を異にする。

日本語における「過去」とは、英語における「時制(tense)」という認知形態で捉えられる事象のものではなく、「現在形(「～する、～しない」)の意識」がテキストを手繰り寄せ、手繰り寄せたその「地点(現在)」での「事態」の「意識・領域」への取り込みによって表現されるものである。「事態の意識への取り込み」によって、「取り込みの記憶」が確認された場合、「言語形式(文法)」として「確定叙述」の「～た」が用いられる。したがって、日本語の「確定叙述」の「た」は、英語の外置化・客観存在化という形態で構造化された「時間」による「時制(tense)」と呼ばれる概念から見出される「過去時制」を表す形式標識でもなければ、「相」と呼ばれる文法概念から見出される「完了」を表す形式標識でもない。「事態が把握されるために自己の意識に取り込まれた経験があるかどうかを確定」する認知作業がなされたことを表す形式標識である。

このように、「事態の意識への取り込みの確定叙述」が「た」であるため、この「た」は英語における「未来」においても使用される。

「買います。」 (英語における未来を現在形)

「よし、買った。」 (英語における未来を確定叙述)

「あっ、こんなところにあった。」 (現在を確定叙述)

「昨日、買いに行った。」 (英語における過去を確定叙述)

「一昨日、送りましたよ。」 (英語における過去を確定叙述)

「あっ、明日はテストだった。」 (英語における未来を確定叙述)

森田良行(1995)においても、日本語における時間の問題を、英語の時制の視点から異なった「確定」意識において説明を試みている。森田良行(1995; 307)における「確定意識」とは、対象(外)について間違いなくそうであるという話し手の気持ち(内)を表したものである、と規定されている。

したがって、過去や完了も、たまたま過ぎた以前の話題が対象となっているだけのことで、既定のこととして、話者の心に確かな間違いのないものと映っているからこそ、「た」による確定表現を取らせたものであろう。「た」の文は、決して過去の話とは限らないのである。こんな例がある。

明日の朝いちばん早く学校に来た生徒が、教室の窓を開けなさい。

(森田良行 1995:308)

日本語における「確定叙述」の「た」とは、「意識」化の対象となる「事態」を、「認知主体の意識」と同化した「認知領域」へ取り込むことで「把握」したことの確認を表すものである。したがって、「現在時制」にも、また一見、英語の「過去時制」や「未来時制」に該当するような状況においても、使用することが可能となる。

新幹線の車内放送である、

「間もなく、京都です。」

というアナウンスは、「時空テキスト(領域)」において到着する「場所」と「時」である「京都」を、「事態把握」における「認知対象」として「現在形の意識」の中に取り込み、「内置化」された「主題トラジェクター」として発話されるため、英語においては助動詞を用いた「未来時制」で把握される事態も、「～です」という「現在形」が用いられて把握されることを表している。また、ここにおいても「認知対象」である「京都」は、「共同主観化されたモード」で捉えられると同時に、「認知主体の意識に同化された主題トラジェクター」である「私達」と「合一化」してしまうため、「言語形式」の係助詞「は」で表される「私達」は、「京都です」という述語の中に「合一化」されてしまう。

本来の現代日本語においては、英語における「時制(tense)」というような文法概念なり、「事態認知」の形態は存在してはいない。「時制(tense)」なり「主語(subject)」という文法概念は、英語を日本語に翻訳する際に発見されたものを無批判に日本語の文法概念の説明に導入したものである。現代の日本語において、「時の把握」を「言語形式(文法)」として反映しているのが「現在形」と「確定叙述」だとするならば、現代日本語の「時」を「時制(tense)」という文法概念によって捉えることはできない。

「時空(spacetime)」とは「時間」と「空間」のことであるが、現代物理学において「時間」と「空間」という概念は、同列に扱われる存在であるという。特殊相対性理論以前では、それぞれ独立に存在すると考えられていた「時間」と「空間」が、特殊相対性理論の視点では、ローレンツ変換によって入り混じるものと見なされている。理論物理学の立場においては、「時空」は「重力」であり「事象同士の関係」とみなされており、アインシュタインの方程式においても、「時間対称性(時間が等方向、過去・現在・未来にも流れること)」が存在すると言われている。

このことは、「過去・現在・未来」がすでに同時に存在しているという数学的解釈が可能であることを意味するが、日本語の「意味」＝「言語形式」の関係を創発させる「始原的な認知モード」は、「過去・現在・未来」を同時に捉える「認知モード(A モード)」だと言える。「時制(tense)」という文法概念を持たず、「事態」を「認知主体の現在形の意識」における「内観」によって「把握」することで創発される日本語の「時」の概念は、実は現代物理学の「時空」に対する認識と非常に近いものなのかもしれない。

6. おわりに

本論考において、

- ① 「意味(概念)」とは「認知主体」による「事態把握のあり方」であり、
- ② 「事態把握(意味)」のあり方は、「認知主体」が用いる特定の「主観」に動機づけられた「認知モード」によって規定されること、
- ③ 特定の「主観」に動機づけられた「事態把握のあり方(意味)」が顕現(創発・具現)化されるためには、特定の「言語形式(文法)」が要求されること、
- ④ 語彙のレベルにおいては「事態把握(意味)」が、構文のレベルにおいては「事態把握(意味)＝言語形式(文法)」の関係が、それを生み出す「認知モード」を動機づける特定の「主観」とその「深度」によって変容を受けること

を述べてきた。さらに、

- ⑤ 日本語における「事態把握」は、「認知対象」と「認知主体の意識」の「同化・合一化」が可能とする「主観」に動機づけられた「認知モード」によってなされていること、
- ⑥ 「共同内観主観モード(Joint Assimilation Mode of Cognition)」によって「主題トラジェクター(trajector)」という文法概念が創発されること、また、「単独内観主観モード(Assimilation Mode of Cognition)」によって「主体トラジェクター(trajector)」という文法概念が創発されること、
- ⑦ 「内置・内観の認知モード」の存在の発見は、日本語における「主語(subject)」及び「時制(tense)」という文法概念の破棄を迫ること、
- ⑧ この「始原的な認知モード(A モード)」を用いて「事態把握(意味)」を図ることは、「認知主体」とっては本来認知的に馴染みやすいものであるため、この「認知モード」を用いた「事態把握(意味)」の仕方が、英語の「語彙」レベルにおける「意味の拡張と変容」を、また、「構文」レベルにおける「形式の拡張と破綻」を齎すこと、

を論じてきた。

以上まとめてきたことがらが言語学上の事実として確認されるならば、英語を代表とするような、外部に世界が客観的に存在するという「主観(subjectiveness)」に動機づけられた「D 型認知モード」により創発された「意味(事態把握のされ方)＝言語形式(文法)」の関係は、「認知対象に自己の意識を重ね合わせることで事態把握が可能とする主観(subjectiveness)」に動機づけられた「A 型認知モード」による「事態把握」によって拡張・破綻させられるという、これまで言語学及び哲学の歴史において誰も見出し得なかったことがらが捉えられたことになるだろう。語

彙の「意味」及び構文の「拡張」の問題を考えるにあたって、語彙や構文といった文法概念では、これらの問題の本質は捉えられない。語彙及び構文といった文法概念の枠組みを超えたところで考察がなされなければならない。この論考において、「客観」という「主観」から逃れながら、「客観」という主観からの逃れを「客観化」とするという、相反的な思考様式を用いることで明らかにしてきたことがらは、言語において「文法」とはアプリアリな存在ではなく、特定の「主観」に動機づけられた「認知モード」が、「事態」をどのように「把握」しているかを創発・具現化する上での不可分な制約であり結果というものである。「意味(事態把握のされ方)」に先立って「普遍的な文法」が存在するのではない。特定の「主観」に動機づけられた「認知モード」における「事態把握(意味)」が、特定の「言語形式(文法)」を要求し、特定の「意味(事態把握のされ方) = 言語形式(文法)」の関係を顕現(創発・具現化)している。「普遍文法(Universal Grammar)」など、この世には存在はしない。存在しているのは、人間の「認識の様態」を規定する「主観(subjectiveness)」である。

<謝辞>

東郷雄二先生、藤田耕司先生からは、重要なお指摘とご意見をいただいた。また、澤田淳氏からは、公刊される前の大切な研究内容の一部を引用させていただきご厚意をいただいた。KLC (Kyoto Linguistics Colloquium) 等でいただいた数多くの貴重なお意見や、また、この拙論を読んでいただける機会をいただいたことなど、こうしたことがら全てに、深く感謝させていただきたい。

<参考文献>

- Croft, William. (2001). *Radical construction grammar: Syntactic theory in typological perspective*. Oxford / New York: Oxford University Press.
- Gibson, James J. (1979). *The Ecological Approach to Visual Perception*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum.
- Goldberg, Adele E. (1995). *Constructions: A Construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hopper, Paul J., and Elizabeth Closs Traugott. (2003). *Grammaticalization*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. (1985). Observation and speculations on subjectivity. In *Iconicity in syntax*, ed. John Haiman, 109-150. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (1987b). *Foundations of Cognitive Grammar*. (Vol. 1). *Theoretical Perspective*. Stanford Univ. Press. 231-236
- Langacker, Ronald W. (1990b). "Subjectification." *Cognitive Linguistics* 1: 5-38
- Langacker, Ronald W. (1993a). "Reference-point constructions," *Cognitive Linguistics* 4: 1-38

- Langacker, Ronald W. (1998b). "On Subjectification and Grammaticization." In König, J.-P. (ed.), *Discourse and Cognition: Bridging the Gap*. CSLI Publication. 71-89
- Langacker, Ronald W. (1999c). "Losing Control: Grammaticization, Subjectification, and Transparency." In Blank, A. and P. Koch (eds.), *Historical Semantics and Cognition*. Mouton de Gruyter. 147-75
- Langacker, Ronald W. (2000). *Grammar and conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter. 297-315
- Neisser, Ulric. (1998). "Five Kinds of Self Knowledge," *Philosophical Psychology* 1-1, 35-59.
- Neisser, Ulric. (1991). "Two Perceptually Given Aspects of the Self and Their Development," *Developmental Review* 11, 197-209.
- Neisser, Ulric, ed. (1993a). *The Perceived Self: Ecological and Interpersonal Sources of Self-Knowledge*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Neisser, Ulric. (1997). "The Future of Cognitive Science: An Ecological Analysis," *The Future of the Cognitive Revolution*, ed. Johnson, David Martel and Christina E. Erneling, 247-260. New York and Oxford: Oxford University Press.
- Taylor, John R. (1995). *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Press. First edition, 1989. 214-5.
- Taylor, John R. (2002). *Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press. 576.
- Traugotto, Elizabeth Closs. (1995). Subjectification in Grammaticalization. In *Subjectivity and subjectivisation*, ed. Dieter Stein and Susan Wright, 31-54. Cambridge: Cambridge University Press.
- 織田 稔. (1990). 『英文法学習の基礎』 東京：研究社出版. 103
- 澤田 淳. (近刊, 2006). 『授受動詞「くれる」、「やる」における「主観化」の非対称性とその動機づけ』
- 中村 芳久. (2004). 『認知文法論 II』 東京：大修館書店. 3-51
- 中村 芳久. (2005). 『認知言語学における構文論：非人称構文から見えてくるもの』 京都言語学コロキウム第2回年次大会
- 森田 良行. (1995). 『日本語の視点 ～ことばを創る日本人の発想～』 東京：創拓社. 301-313
- 山梨 正明. (2000). 『認知言語学原理』 東京：くろしお出版. 250
- 山梨 正明. (2004a). 『理論言語学の新展開 ―認知言語学のパラダイム―』 人工知能学会誌 19 巻 1 号. 93
- 山梨 正明. (2004b). 『ことばの認知空間』 東京：開拓社. 180